# 藤縣文藝

# 藤縣文藝

昭和四十六年三月十五日　印刷
昭和四十六年三月二十日　発行

# 藤楓文芸　第3刊【非売品】

複製
不許

編者　財団法人　藤楓協会
発行者　財団法人　藤楓協会
東京都千代田区内幸町一―三―五　〒一〇〇
新栄ビル　三階
電話東京（〇三）五〇一―一二三九番（代表）

制作　有限会社　教文堂グラフィック

印刷・有限会社　教文堂
製本・有限会社　真光社

# 第3刊の発行に当って

財団法人　藤楓協会理事長
聖　成　稔

医学が今日の如く進歩しなかった頃は、らいは数多い病気の中で最も悲惨なものであった。確実な治療法もないので、ほとんど不治の病に等しく、その上、らい菌の感染によって起る伝染病であるため、この病気を予防するためには、隔離以外に手段がなかった。

すなわち不幸にして、この病気に罹った人びとは、家族と別れ、故郷を離れ、あるいは職業、学業を捨て、遠く全国各地に設けられた療養所に入所したのである。

このような人びとがらいの宣告を受けた時の悲嘆驚愕の気持は察するに余りあり入所後もその不幸を呪いまた懊悩の日々がつづいたのであった。しかし多くの人びとはこのような絶望の淵から起ち上り、やがて強く生きぬく境地に達せられ、療養の日々をあるいは信仰の道に、あるいは特技、趣味を生かして精進に過されるようになったのである。

藤楓文芸はこの中、短歌、俳句、川柳、詩、随筆等の作品につれづれの日々を送っておられる方がたの優秀作を全国の療養所から応募していただき、わが国一流の先生方に選をしていただき、広く世の人びとに御紹介するものである。

この作品を通じて療養所におられる人びとが、如何様の生活をしておられるか、また如何に強くたくましく人間として生きておられるか、その姿を一人でも多くの人びとに理解していただきたいのである。

今や医学の進歩はらいについても例外ではなかった。すなわち適確に効果のある薬品が発見され、らいは治る病気となったのである。

すでに数多くの人びとが療養所の門を出て立派に社会復帰をされ、社会の一員として活動をされているのである。

現在国立十一カ所、私立三カ所の療養所に約九千名の人びとが在所しておられるが、その大部分はすでにらいは治り、他人に伝染させる危険はない状態になっているので、療養所の中は昔とは比較にならないほど明るくなっている。

しかし老齢のためのあるいは昔、良薬のなかったころに病気が重くなり、その後遺症のために社会復帰を断念せざるを得ない人びとが多いのも事実であるが、一面には病が治ったので、残る



此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

余生を社会復帰したいという熱望を持ちながらも、未だに強く社会にはびこるらいに対する誤った考え方、偏見のために決断しかねている人びとも少なくないのである。

らいを正しく理解していただくために、貞明皇后様の御遺徳を体して日々活動する藤楓協会は、その運動の一環としてこの藤楓文芸を世に送るのである。

一人でも多くの人びとがこの書を通じ、らいに対する正しい知識を得られ、この運動に参加していただくことを、第3刊の発行に当って強く願うものである。

# 療養文芸作品募集要領

**○目　的**

入所者の作品を通じて、療養生活のさまざまの姿を社会に伝え、らいに対する正しい認識を訴え、入所者と一般社会との心の交流を一層緊密にすることを目的とします。

**○募集文芸作品の種類**

「詩」　「短歌」　「俳句」　「川柳」　（各雑詠）　「随筆」

**○応募作品の選者**

**詩**　村野四郎氏
**短歌**　木俣修氏
**俳句**　加藤楸邨氏
**川柳**　長谷川霜鳥氏
**随筆**　石垣純二氏

**○掲載する作品**

右の各選者によって応募作品を選考し、優秀なるものを掲載することといたします。

**○応募の方法**

詩、随筆は一人一篇、短歌、俳句、川柳は一人五首又は五句までとし、未発表のものであること。

**○応募の書式**

一、所属療養所名

二、氏　名（ふりがなを付すること）雅号を書き添えても構えません。

三、年　齢

四、文字は必ず楷書にてはっきり書くこと。

**○送付方法及び送付先**

応募作品は各療養所において、各種目別（詩、短歌、俳句、川柳、随筆）にとりまとめ、一括して藤楓協会宛に送付すること。

# 藤楓文芸 第3刊 目次


序　財団法人藤楓協会 理事長 聖成稔……一

療養文芸募集要領……四

詩　村野四郎 選……九

短歌　木俣修 選……二七

俳句　加藤楸邨 選……五五

川柳　長谷川霜烏 選……八一

随筆　石垣純二 選……一三一

藤楓協会とは……一五三

らいを正しく理解するために……一五六

らい療養所所在地及在所者数……一六〇


題字　倉永圓清

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

# 詩

村野四郎選

特選

# 耳

耳タボがなくとも
声はひびく
伝音――感音
まだ生きていた
二つの神経

〈多磨〉木山　緑

不感症のコマクに
まともに　突刺さる耳鳴り
キリキリと痛い

距離感　ゼロ
方向感　喪失の
この硬い垢じみたコマクよ
自分を呼びとめる自分の声が
たとえ向側へとどかなくとも
いつも呼び続けていたい
内部へと　内部へと——

ああ　残されている
この体温の貴さと　なつかしさよ

# 僕の瞳

〈多摩〉 鈴木 ひさし

眼ぶたと睫毛に守られて
良く見えた　僕の瞳
かつては　映画街のネオンも
花のように　美しく見えた
僕の瞳

十五夜のまんまるい月も
銀のように　キラキラと
光つて見えた　僕の瞳



此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com